

近松青年期の述作

諏訪 春雄

一

現在の近松研究は、近松の確実作として天和三年（一六八三）九月に刊行された宇治加賀掾正本の「世継曽我」をもって最初とするのが常識となっている。この作品にしても、内題下、奥付ともに近松の署名はないのであるが、近松の最初期の確実作として疑われていないのは、正徳元年（一七一）刊行の義太夫段物集『鸚鵡ヶ杣』の序文中に、義太夫が、「世継曽我の道行に馬かたいやよとどり歌入し事相応せず一番の瑾今聞に汗をながすと三十年前を後悔ある作者の心芸道の執心さも有べきなり」とのべている事実による。ここで義太夫が三十年前を知っている浄瑠璃作者、つまり、義太夫と三十年間の親交のあった作者としては近松以外に考えられないからである。しかし、この『鸚鵡ヶ杣』の義太夫の序文にしても、「世継曽我」の道行文の作者について語っているだけであって、道行文以外の個所については何ものべていないことに注意しなければならない。もし、一つの作品において、道行文と他の個所が別々の作者によって書かれたこともありえたとする事実が証明されれば、「世継曽我」全

体の作者を近松と決定するためには『鸚鵡ヶ袖』序文以外の他の資料が必要となるのである。

「世継曾我」が刊行された天和三年に近松は三十一歳である。「世継曾我」以前にも近松はいくつかの作品を書いていたのでなかるうかという推定は当然成り立つ。現に、そうした考えに基いて、いわゆる近松の処女作に関するいくつかの説がこれまでに提出されている。ただ、それらの説が学界の大勢を動かすまでに至らないのは、いずれも情況証拠であって、大方を納得させるに足るだけの物証を欠いているからである。

新しい物的証拠の出現は今後も期待できないであろう。とすれば、さしあたって、我々のとるべき態度としては、現在の学界の大勢のように、「世継曾我」以前は不明の世界として避けて通るか、あるいは、情況証拠は情況証拠なりに論理的整合性を与えて、そこに一筋の道を見出すか、のいずれかであろう。

本稿では後者の態度を採って、きわめて困難の予想される課題ではあるが、近松青年期の述作について考えてみることにする。

一一

筆者は、以前、『文学』の昭和五十年六月号に発表した「延宝の近松―存疑の世界―」で、これまでの諸家の近松作認定の根拠を三種六類に分けてみたことがある。

- a 正本の署名の有無
- b 内容的関連性

- 1 確実な近松作に内容上の関連をたどれること

- 2 作風上の特質

3 慣用表現

4 心 象

c 他資料による確認

これらのうち、aとcはいわゆる物的証拠に属するもので、「世継曾我」以降の作品の認定は主としてこの両者によっている。問題はbの「内容的関連性」であって、「世継曾我」以前の存疑作は全てこの基準によって選定されているのである。

以下、具体例についてみる。

寛文十三年（一六七三）正月に刊行された井上播磨掾正本に「花山院后諍」という作品がある。この作を黒木勘蔵氏は、近松の最初の作品とされるが、そのように考えられる黒木氏の挙げる論拠は以下の三つである。

第一にこの作の主旨は藤壺の嫉妬の怨霊出現であるが、加賀掾の正本も、都万太夫座の脚本も、原作と本質を同じうし、当然同一作者の手によって次第に展開せらるべき脚色と見られる事である。

第二に近松六十歳の時の作「弘徽殿鶺鴒産家」の道行に、この作の道行がそっくりその儘用ひられて居る事である。「鶺鴒産家」は勿論「后諍」の改作であるが、全篇を通じて非常に筋が複雑になり、文章も全然面目を一新して居るに拘らず、全篇中で最も文章に彫琢を加へ、華を飾るべき道行文に大間で古風な四十年も前のものをその儘取つてある。これを何と見るべきであるか、他人の作から借りたとはどうしても考へられないではないか。これは其原作が自己の青年時代の作たる事を裏書き記念する意味を以て他の部分との不調和を忍んで取入れたと解釈するのが穏当ではなからうか。

第三に同じ関係は、延宝四年廿四歳の作「滝口横笛」と正徳四年六十二歳の作「娥歌加留多」との間にもある

のは、第二の理由の有力な傍証である。故に私は「花山院后諍」を近松二十歳の時の作と推定する。少し若過ぎるといふ口実だけで、以上の理由を一蹴するのは天才近松に対してはどうかと思ふ。

以上の黒木氏の挙げる三つの理由については多少の注が必要であろう。第一で加賀掾の正本といっているのは、延宝五年の宇治嘉太夫の正本「花山院后諍」（内題殿上之うはなり討）のことである。この嘉太夫本は井上播磨掾正本「花山院后諍」五段をほとんどそのままとり、末二段を改作したものである。都万太夫座の脚本というのは、『古今役者大全』の巻一「狂言作者の事」（寛延三年）に「京都都万太夫芝居へ、近松門左衛門ありつき、藤壺の怨霊、直に藤の花が大蛇と成る工夫より、門左衛門くともてはやしぬ」とあるものである。ただし、この「藤壺の怨霊」の上演年については、伊原敏郎『歌舞伎年表』、黒木勘蔵前述書、藤井紫影『近松全集第九』などが一致して延宝五年としているが、秋葉芳美氏は、「近松脚本著作年代考」（『演劇学第一巻第一号』昭和七年五月）で延宝五年上演説の根拠のないこと、『耳塵集』の記事に顔見世の役者付に狂言作者の名を記すようになったのは延宝八年とある事実、貞享四年正月刊の『野良立役舞台大鏡』によってこのころまでに近松が都万太夫座につとめていたことは確実なこと、『劇代集』に近松が狂言作者として都万太夫座につとめた年を丑の年とすること、などを総合して、『藤壺の怨霊』の上演年を貞享二年前後とされている。諸家が「藤壺の怨霊」を延宝五年上演とするのは、おそらく同年の宇治嘉太夫正本「花山院后諍」との関係からであろう。しかし、その根拠は弱く、もし『劇代集』に右の記事があるなら、貞享二年前後とする秋葉説は認められねばならない。^{注2}

黒木氏の第一の論拠を整理すれば次のようになろう。

貞享二年（黒木説では延宝五年）都万太夫座上演の近松作「藤壺の怨霊」とほぼ同趣向が延宝五年の宇治嘉太夫正本「花山院后諍」（内題殿上之うはなり討）の第三段と寛文十三年の井上播磨掾正本「花山院后諍」第三段にみ

られる。以上の事実関係からこの三つの作品はすべて近松の手にかかる述作と黒木氏は推定する。

次に第二の論拠に移る。

近松六十歳、正徳二年の上演と推定されている「弘徽殿鶉羽産家」の第四段「花山院みち行」は、延宝五年の宇治嘉太夫正本「花山院后諍」（内題殿上之うはなり討）第四段の道行と同一文であり、さらにさかのぼって、寛文十三年の井上播磨掾正本「花山院后諍」の第四段道行と三個所の小異を除けば同一文である。これは、播磨掾正本、嘉太夫正本が共に近松の作であるために、記念する意味で「弘徽殿鶉羽産家」に道行文を取入れたものである。以上が第二の黒木氏の論拠である。

さらに、第三の論拠として、延宝四年の「滝口横笛」と正徳四年の「娥哥かるた」の関係をあげる。

「滝口横笛」関係の諸本は、阪口弘之氏によって以下の六本が紹介されている。^{注3}

- (1) 慶応大学本 絵入り十八行十五丁半（内題、外題不明）
- (2) 赤木文庫本 絵入り十八行十七丁「よこぶえたき口恋之道心」
- (3) 『近松門左衛門全集』第十卷所収本（原本不明） 絵入り十八行十八丁「滝口横笛紅葉之遊覧けり恋之道心」
- (4) 『柳亭翁雜録』記載本（原本不明） 絵入り「滝口横笛」
- (5) 大東急文庫・国会甲本・演博本十行三十二丁本「よこぶえ」
- (6) 国会乙本 絵入り十六行十二丁本「滝口道心の由来」

このうち、享保頃の江戸版である(6)を除き、阪口氏は、右諸本の関係を、(1)は延宝二年伊藤出羽掾正本であって、これが祖本となつて、(2)(3)(4)(5)の山本角太夫正本が生れたと整理された。そして、さらに、正徳四年の近松作「娥哥かるた」の道行文は出羽掾本を増補改作した角太夫本、具体的には(2)赤木文庫本にもっとも近く、道行文を除い

た部分は(1)の伊藤出羽掾本に拠っていると断定された。

勿論、黒木氏は右の(1)の存在を知らずに、(2)または(3)をもって近松作の「娥哥かるた」依拠本と推定された。そして、その関係を近松二十歳のときの「花山院后諍」と六十歳のときの「弘徽殿鶉羽産家」に及ぼされて、この「花山院后諍」を近松青年期の処女作と決定する傍証に用いておられるが、しかし、山本角太夫の語り物「滝口横笛」が近松作であるという決定的証拠は何もないのであって、「花山院后諍」が存疑作であると同様に、「滝口横笛」もまた存疑作の位置に止まってそれ以上のものではない。

黒木氏が、近松青年期の作を決定する論拠は二つにしばられる。一つは、近松確実作との趣向の類似、一つは、同じく近松確実作と同一の道行文の存在である。

この二つの論拠のうち、最初の趣向の類同性は、作者認定の決め手とならぬことは、近世演劇にすこしなじんだことのある者には自明である。他人の作の趣向を自作に利用することは、役者を介して、歌舞伎ではごく普通に行われていたことであり、また、浄瑠璃においても、たとえば、近松と紀海音といったライバル同士が、たがいに相手の作の趣向をとって自作を書きあげていた。その例は数多く指摘できる。

問題は第二の同一の道行文を使用した場合である。

この問題を検討するために、すこし範囲を広くとって、元禄以前の作者不明時代の浄瑠璃と詞章の上でつながりを持っている近松確実作、または、近松存疑作を拾いあげてみると、次のような例を列挙することができる。

寛文三年「公平法門諍」↓元禄二年「忠臣身替物語」

寛文十一年「かげきよ」↓貞享二年「出世景清」

寛文十三年「花山院后諍」↓正徳二年「弘徽殿鶉羽産家」

延宝三年「為義産宮詣」↓正徳二年「姫山姥」

延宝四年以前「滝口横笛紅葉之遊覧」↓正徳四年「娥哥かるた」

延宝六年「三社託宣由来」↓元禄十二年カ「源氏烏帽子折」

天和元年以前「鳥羽恋塚物語」↓元禄十一年「一心五戒魂」

天和元年「つれく草」↓元禄初年「蟬丸」

天和三年二月以前「念仏往生記」↓元禄初年「大原問答」

天和三年二月以前「念仏往生記」↓元禄七年以前「文武五人男」

天和四年「甲子祭」↓元禄初年「蟬丸」

貞享二年「千載集」↓貞享三年「薩摩守忠度」

貞享三年「扇の芝」↓元禄三年「佐々木大鑑」

貞享三年「盛久」↓貞享三年「主馬判官盛久」

貞享年間「あふひのうへ」↓元禄初年「蟬丸」

元禄初年「弁慶京土産」↓元禄初年「本朝用文章」

以上十六例をあげた。精査すればこうした事例はまだ増加する可能性が考えられるが、とりあえず、この十六例について、近松作と先行作との関係を検討することにしよう。

三

「公平法門證」と「忠臣身替物語」

「忠臣身替物語」と題する正本には宇治加賀掾のものと竹本義太夫のものとが伝えられている。早稲田大学図書館所蔵の絵入り十七行十三丁半本は巻末に「元禄二年巳ノ八月吉日」の刊記があつて、太夫名を欠いているが、信多純一氏は宇治加賀掾正本かと推定しておられる。^{注4}一方、同じ「忠臣身替物語」の外題名で奥付に竹本義太夫の署名を持つ大型八行四十七丁本が存在し（早稲田大学図書館、近松全集第三巻底本は文楽蔵）、第二段の本文に小異がある。この義太夫系の「忠臣身替物語」はのちに「今様かしは木」と改題され、十行三十丁本、十行二十八丁本等が種々の書肆から出版され、山本版には竹本筑後掾・近松門左衛門連名の奥付を持つ本が存在する（東大教養学部研究室蔵）。「今様かしは木」はさらに再改題されて「金平法門諍」と題した十行三十丁本も世に出た。以上、この作品は「忠臣身替物語」（宇治・竹本）↓「今様かしは木」（竹本）↓「金平法門諍」（竹本）と外題を改めて世に行われたものと考えられる。

「忠臣身替物語」が古浄瑠璃の「公平法門諍」の改作であることは水谷不倒の『絵入浄瑠璃史』に説かれて以来よく知られた事実である。「公平法門諍」の筋をもっとも普通にみられる寛文三年の上総少掾藤原正信の正本によつてまとめてみると次のようになる。

天下の將軍源頼義は、三人の子のうち次男義宗を僧侶にしようとして満容上人に託すが、義宗は剃髪をきらつて公平のもとに逃げこむ。公平は満容と会つて法論をいどんだ。頼義は激怒して義宗と公平の討伐を長男の義家に命じた。義家は弟を討つ苦しさを家来の国綱に語った。国綱は主の義家の苦衷を察して、我が子竹若丸を身代りにして、義宗と公平を助けた。公平は城に火を放つて石山寺に落ちた。弟の身を案じる義家の奏請によつて、帝は頼義父子を和解させた。

この「公平法門諍」を改作した「忠臣身替物語」の梗概を竹本座上演の正本によって示すと次のようになる。

源家四代の將軍源賴義は菩提のため三人の子のうち次男義綱を満要上人に託して僧侶にしようとしたが、柏の前という恋人のある義綱は父の命に服さない。柏の前の依頼を受けた公平は満要上人に会って法論をいどむ。公平は義綱を伴って石山寺へ逃れ、賴義は長男の義家に公平の討伐を命じた。寄手に加った臣下の和田左衛門為宗は、一子竹若丸を義綱の身代りとし、また、戦死者の首を公平の身代りとして二人をひそかにおとした。我が子竹若の死を知って悲嘆にくれる為宗の妻の面前に、竹若の亡霊が出現し、追善回向を頼んで消えた。義綱を殺したとしてそのとがを賴義の御台から責められた義家は自害しようとして八幡の神託によって思い止まった。義綱の流れ灌頂の場で公平は満要に法論をいどんで追い払った。義綱の生存を知っていた賴義は公平・為宗の忠義を賞し、竹若丸の代りに柏を為宗の養子として義綱と娶せた。

以上の書き替えによって、「忠臣身替物語」は、第一段恋・問答、第二段修羅・景事、第三段愁嘆、第四段道行、第五段問答というかたちをとり、義太夫が理想とした五段の音曲理念をほぼ完全にそなえることになった。

「忠臣身替物語」は「公平法門評」に筋を負うに止まらず、詞章上でもほぼそのままに継承している個所がある。たとえば、「忠臣身替物語」の第一段で賴義が義綱に出家を命じる条である。参考のためにそのはじめの数行を抜出してみる。^{註5}

「公平法門評」

それしやはのゑいやうは。風のまへのちり。一念のぼだいしんは。めいとのもしび。所せん三人の子共の中にて。一人はしゆつけさせ。ながき世のくがいをものかればやとおほし召。二男かもの次郎殿を。御そば

「忠臣身替物語」

百年のゑいようはふうぜんのちり。一念のぼだいしんはくはうせんのもしび。しよせん三人の子共の中一人は出家になし。みらいのためにとおほし入。次男加茂の次郎殿を御そばかく召れ。我こしかたをあんず

ちかく召よせられ。いかによしむね扱も我過にし方を
 あんするに。

るに。

「忠臣身替物語」には宇治座上演の正本と竹本座上演の正本が残されている。この両者は宇治座の加賀掾本が竹本座の義太夫本に先行すると考えられる。^{注6}そして、加賀掾本と義太夫本の大きな相違は、加賀掾本の第二段に石山月見の部分を欠いていることである。即ち、義太夫本の第二段の冒頭は、我が屋敷に立戻った公平がかくまっていた義綱や自分の手勢を引具して江州の石山寺へ逃れる場面ではじまり、つづいて、公平、義綱らが石山の月を賞する節事の場面がつづく。この節事は、「公平法門諍」の詞章をほぼそのままに利用している。この個所が加賀掾本にはそっくり脱落している。

この加賀掾本と義太夫本の相違はかなり興味ぶかい問題を提供する。

「公平法門諍」の正本は、寛文三年九月吉日山本九兵衛版の刊記を持つ天下一上総少掾藤原正信の正本と、太夫も刊年不明の鱗形屋版が現存するが、それらの祖本として、齊藤月岑が『声曲類纂』中に触れている和泉太夫正本の存在が推定される。この和泉太夫とその後の山本版や鱗形版との相違として、室木弥太郎氏は石山の月見の景事の有無をあげておられる。^{注7}氏はいわれる。

本書（京の山本版）も、江戸の鱗形屋板も共通して、江戸の和泉太夫らしくないものが一つある。それは「並石山落」として月見の景事が眼目になってゐる部分である。これはいかにも上方風である。「菅原親王」でもさうであったやうに、この部分は元版の和泉太夫正本にはなく、上方で付け加へたものではなからうか。

この室木氏の推定を実証するものが「忠臣身替物語」の加賀掾本と義太夫本の相違ということになる。とすれば、「忠臣身替物語」の加賀掾本はこの推定和泉太夫正本に拠り、義太夫本は京の山本版に拠って書き替えられたとい

う推定がなりたちそうである。

「かげきよ」と「出世景清」

近松の「出世景清」が所属太夫不明の古浄瑠璃「かげきよ」に拠っていることについてはすでに角田一郎氏に詳細な研究がある。^{注8}氏は、近松の「出世景清」が直接依拠した本文としては、初段の構想に古浄瑠璃「かげきよ」がいささかの影響を与えているが、五段目の方は明らかに舞曲が影響を与えたとされて、首を斬られたはずの景清がなお牢中に生存しているのを重忠が発見して頼朝に注進し、斬首役だった佐々木と争論する箇所をあげておられる。氏によれば、この趣向は舞曲に存在していて古浄瑠璃「かげきよ」には省略されているとされるが、しかし、舞曲の本文（角田氏は新群書類従本に拠られた）を調査しても、氏のいわれるように、梶原と佐々木の論争場面は存在しない。むしろ、以下のような共通本文の比較を通して、近松は舞曲よりも直接古浄瑠璃に拠って「出世景清」の構想をかまえたともみるべきであろう。「出世景清」の第四段冒頭の入牢中の景清の描写である。

「出世景清」

いちいしらかしくすの木とがの木。
ながさ一丈にとらせ地へは七尺ほり入上三尺のつめろうに。しこの木をもつてくもでがうしに切くん。一尺二寸の太くぎのうらをかへさず打たればつるぎをうへたるごとく也。七尺ゆたかのかげ

舞曲

いちいしらかしとがくすの木ながさ一丈にとらせて地へは七尺いれうへをば三尺のつめろうにこしらへ四五の木をとりよせくもでがうしにきりくんで一尺三寸の太くぎをもつてちやうくとうち付くぎのさきをかへさねばろうのうちは

古浄瑠璃

いちいしらかしくすの木ながさ一丈にとらせちへは七尺入上三尺のつめろうにこしらへしこの木をとりよせくもでがうしに切くんで一尺二寸の太くぎをもつてうくく打付くぎのさきをかへさねばろうの内はほらをほつてつるぎ

きよをふたへに取ておし入かみを
七_わにたばねて七_方へこそつた
りける。あしをろうより引出し。
ゆんでめてへ取ちがへ。山だし七
十五人してひいたるくすのきにて
あげほだしをうたせ。しつちやう
つめがね。たうくぐる。ちび
きの石さいもくをつみかさね。く
びにはねほりの大づを三本迄か
づかせたり。

ほらをほつてつるぎをうへたるご
とくなり……七尺ゆたかのかげき
よを二重にとつてをしいれかみを
ば七はにたばねて天じやうのかう
しへ七_方へつたりけりあしをば
ろうよりひきいだし……弓手めて
へとりちがへ山出七十五人して引
たるくすの大物にてあげほだしに
ぞうつたりける……しつちやうが
ね……とうくくるり木千引のい
しざいもくをうへにとりつむだり
こしにとうのつな三すじゑつてつ
けさせてくびにはねほりの大づ
を三はんまでかつがせたり

をうへたるごとく也……七尺ゆた
かのかげきよをふたへに取てをし
入かみを七_わにたばねて七_方へつ
つたりけりあしをはろうより引出
し……ゆんでめてへ取ちがへ山
だし七十五人してひいたるくすの
木たいもつにてあげほだしにぞう
つたりける……しつちやうつめか
ね……たうくぐるきちびきの
いしざいもくをうへにつみたりけ
る……くびにはねほりの大づを
三はんまでかつがせたり

傍線の異文が問題となる七箇所、その全てが「出世景清」と古浄瑠璃の近親性を示しているのに対し、「出世景清」と舞曲と近親性を示す箇所は一個所も存在しない。

「花山院后諱」と「弘徽殿鸛羽産家」

この古浄瑠璃と近松確実作の関係、及び、その間に宇治嘉太夫の「殿上之うはなり討」の介在することについて

はすでに前に黒木勘蔵氏の論拠を紹介した際に触れた。

「為義産宮詣」と「嬬山姥」

『日本古典文学大系近松浄瑠璃集下』の「月報28」に大久保忠国氏が、

『嬬山姥』第三「とうろうの段」は延宝三年十月刊、宇治賀太夫正本『為義産宮詣』の同名の段（『竹子集』所収）に拠っている。本書二〇〇頁、同段のはじめから約四行、「紫苑鴈皮に嬰衆しもつけ」の辺までは殆ど同文であり、次に数行補筆、同頁終りから二行目の「月もふけゆく」以下、次頁二行目の「飾りける。」まで再び『産宮詣』を取っている。

本作の初演年月に疑問のあることは解説に述べたが、ことによると通説より一年早く、正徳元年七月初演だったかもしれない。浄瑠璃界の大先輩であり、特に近松が若い頃親しかった賀太夫（加賀掾）は同年正月に没したので、その初盆に際し、追善のために生前の当り浄瑠璃を上演したと考えることが許されれば、この段の意味が判然とするであろう。

とのべておられる。

『為義産宮詣』は震災前の東大図書館に絵入りの十七行本が所蔵されていたことが『頼原古浄瑠璃ノート』にみえる。水谷不倒の『絵入浄瑠璃史』はこの正本の題簽、挿絵、本文最終丁を載せている。それによると、この正本の題簽には「伊勢島宮内上り宇治賀太夫直正本」とあり、本文最終丁の刊記には「延宝三年乙卯十月吉日」とある。内題は「景政雷論」とあったことが『頼原古浄瑠璃ノート』によって知られる。

寛文年中に刊行された江戸の近江太夫と虎屋小源太夫の正本に「かけ正いかづちもんだう」がある。この作が「為義産宮詣」の祖本である。「かけ正いかづちもんだう」の梗概は次のようである。^{注9}

八幡太郎義家が天下の武将として君臨している時代、若君が誕生、義家は鎌倉権五郎景政を補佐として岩清水八幡宮へ産宮詣をさせた。この若君がのちの六条判官為義である。諸大名が若君の誕生を祝って種々の宝物を献じたなかに越の忠広が雷丸という太刀を献上したことから景政と忠広は口論となった。義家はかねてから景政の養子景久を寵愛していたが、景政に恨みを持った忠広は景政親子を義家に讒言して、景久を君側から退けた。しかし、北条、鎌田、金子らの景政の同僚が義家にとりなし、景政は忠弘の首を引抜いた。

この「かけ正いかづちもんだう」はのちに改作されて上方でも上演された。『新群書類従第九』に所属太夫未詳の「いかつち論」という正本が収録されている。本文はほとんど「かけ正いかづちもんだう」によって、多少の詞句の改訂を施した程度のものである。また、これとは別に、井上播磨掾に「権五郎いかづち論」という作品のあったことは水谷不倒が『絵入浄瑠璃史』に触れており、播磨掾の段物集『忍四季揃』に「いかづちろんよしいまちはものがたり」が収められていることによってその事実が確かめられる。この『忍四季揃』の一段を前述『新群書類従』所収の「いかつち論」と比較してみると詞章と節付はほぼ一致するので、『新群書類従』所収本を井上播磨掾の正本とみてよからう。

「為義産宮詣」は井上播磨掾の正本によって主として第四段を書き替えた作品である。水谷不倒は『絵入浄瑠璃史』の中でその改作の工合を次のようにのべている。

「為義産宮詣」に於いて、改作した部分を挙げて見ると、「雷問答」では、景久が、義家の勸気を蒙って、伏見太夫清介に預けられた事を聞いて、景久の母と妹花代とが悲しんで伏見清介の所へ、面会に行くことになってをる。即ち親子兄弟の人情が写されてをるに對し、加賀掾の『産宮詣』では、此妹の花代を、伏見清介の妹に書替へ、清介が一夜聖靈祭に燈籠を飾り、景久の無量を慰める。景久はくつろいで見物し、自分の住居に帰らうと

する途中に、花代が待受け、日頃の愛をささやく。景久は謹慎中であるから、一たんは拒絶するが、花代の熱情に負けて、割なき中になるといふ筋で、愁歎場が濡場に書替られた点が特色である。併し加賀掾の作としては、大したものではなく、余りに古浄瑠璃に縋り過ぎてゐる。これはまだ開場して間もなく、新作の準備が行届かなかったのであらう。

この水谷の説明によって、「為義産宮詣」は、井上播磨掾の「いかつち論」全六段の四段目のみを書き替えて景久花代の濡れ場を挿入した作であつたことがわかる。前述したように、「為義産宮詣」の正本は現存しないが、延宝六年の宇治加賀掾の段物集『竹子集』中に「為義産宮詣四機」と題して、井上播磨掾の「いかつち論」の第二段の義家景久痴話物語が、また、「同とうろうの四機」と題して、先掲水谷の記述から推定される第四段の燈籠飾りの場面が収められている。この「とうろうの四機」が「姫山姥」第三段に「とうろうの段」として数行の補筆を伴って挿入されたことは大久保忠国氏の言の通りである。

「姫山姥」の第三段は清原高藤の讒訴によって勅勘の身となつた源頼光が臣下の美濃国の能勢の判官仲国の許に忍ぶという節の設定である。追われる身の頼光を慰めようとして、仲国は妻の小侍従、一子冠者丸などをはべらせて西側の欄干に多くの燈籠を飾らせ、酒宴を催す。この場面設定は、主君の勘当を受けた景久が伏見太夫清介に預けられ、清介が景久の無聊を慰めようとして一夜性霊祭に燈籠を飾るという状況とみごとに一致する。しかし、近松程の作者なら、ことさらに加賀掾の古い語り物から筋を借りるまでもなく、新しい節事を作製することは容易であつたはずである。或いは大久保忠国氏が指摘されるように宇治加賀掾の追善といったような事情が働いていたと考えられるが、ただ、氏の上演年月についての御推測は実証の資料を欠いている。

「滝口横笛紅葉之遊覧」と「娥哥かるた」

この両者の関係については先に阪口弘之氏の論文を紹介した。阪口論文の要点は、近松作の「娥哥かるた」の構想は伊藤出羽掾本に拠っており、その道行文は山本角太本に拠っているという指摘である。伊藤出羽掾本の道行はかなり短く、とうてい「娥哥かるた」の道行文に利用することは不可能であったから、全体の構想は伊藤出羽掾本に拠った近松が、道行文は角太夫本から採用したということはあり得ることである。そして、そこから生じてくる興味ぶかい、しかし、解決困難な課題についてはのちに触れたい。

「三社託宣由来」と「源氏烏帽子折」

元禄三年正月上演の義太夫正本「烏帽子折」については、内題下に近松の署名のある正本は未だ発見されていないが、奥付に近松の署名のあるものは残されており、しかも、その署名には花押も認められる。『近松全集第三巻』所収の山本九兵衛八行五十四丁本である。内題下署名に次ぐ確実度といってよからう。義太夫は、この「烏帽子折」をのちに改訂して、「源氏烏帽子折」として上演している。この「源氏烏帽子折」には数種の正本があり、そのなかには、奥付に花押は欠くが近松の署名を持つ本が存在する（山本版十行本）。

「烏帽子折」から「源氏烏帽子折」への改訂の仕方は、「烏帽子折」第五段口の蛭が小島頼朝配所の場面で頼朝が長田を成敗して平家討伐を思い立つ部分はそのままに残し、そのあとにつづく牛若の伊勢神宮参拝の条と「はしらごよみ」の節事をはぶき、その代りに、宇治加賀掾の「三社託宣由来」の第五段の「二位中将宮めぐり」をそのまま持つてきて、男主人公名を二位の中将雅仁公から変更して御曹子牛若に、女主人公名を照日の前から東雲に変え、「牛若宮めぐり」と改題して、第五段の後半を満たしている。

「烏帽子折」は謡曲の「烏帽子折」などに拠って、源義朝の死後、その妻常盤が子をつれて流離することから始まり、牛若の生い立ち、元服、東国下向のことなどをしくんだ。「義経記」物の一種といえる。一方、「三社託宣

由来」は、前関白基房の先妻の腹の姫照日の前が、継母に苦しめられながらも、伊勢、石清水、春日の三社の靈験によって危難をのがれ、先帝の二の宮雅仁親王と結ばれて幸福を得るまでの次第を劇化している。両者は筋の上では全く無関係の作品である。節事だけが筋とかかわりあいなしに切り離されて利用された例である。

元禄三年の「烏帽子折」の牛若の伊勢神宮参拝の条にはその前年の元禄二年の秋の伊勢遷宮の事がのべられており、また、つづく「はしらごよみ」には元禄三年の干支を当込んだ文句が綴り込まれていて、「源氏烏帽子折」上演の年の事情に合わなかったためにこれをはぶき、同じく主人公が宮めぐりをする「三社託宣由来」の景事を都合の悪い主人公名だけ変更して利用したものであろう。

「鳥羽恋塚物語」と「一心五戒魂」

宇治加賀掾正本「鳥羽恋塚物語」は天和元年（延宝九年）六月下旬刊行の加賀掾段物集『大竹集』に「恋塚物語」として、「為若道行」と「勸進帳」が収められているところからこのときまでの成立と認められている。のちに、元禄十一年にこの改作である「一心五戒魂」が竹本座で義太夫によって語られた。さらに、「一心五戒魂」は、同じ義太夫によって、元禄十五年に再演されたらしい。元禄十四年の石井兄弟の仇討をしくんだ一段浄瑠璃の「道中評判敵討」の正本に「一心五戒魂切上り」とあり、また、明和版『外題年鑑』によると、元禄十五年九月九日に「新一心五戒の魂」という作が上演されたことになっている。宇治加賀掾座では元禄十六年の十一月に義太夫の「一心五戒魂」をほとんど同文のままにとって「一心五戒魂」の外題で語っている。これらの正本には近松の署名を認めることはできないが、近松死去の翌享保十年六月の盆興行に「復鳥羽恋塚」と改題して竹本座が上演した際の正本八行本の奥付には筑後掾・近松の署名を認めることができる。

「一心五戒魂」は、文覚が那智の滝で荒行の最中に悶絶し、かれの胸中から五色の玉が飛び出して、四方へ離散

することから筆を起し、以後、かれの過去未来の行状を夢にみるという筋となっている。「鳥羽恋塚物語」を下敷として筋を複雑にしたもので、ことに第三段、第四段は、「鳥羽恋塚物語」の初段切から二段目、三段目の筋をそれぞれにとり入れて劇化しており、詞章上の類似点も多く指摘できる。その間の関係をたどってみると次のようになる。

「鳥羽恋塚物語」の梗概は次の通りである。

近衛院の治世、摂津渡辺橋の供養の奉行に任じられた遠藤盛遠は渡り初めの折に叔母衣川に伴われた従妹の袈裟御前を見染め、叔母に袈裟をくれるよう強要する。袈裟は止むなく夫の源渡を手引きして殺したのちに添おうと約束して、みずから盛遠の手にかかって死ぬ。盛遠は討った首が袈裟のものと知り、渡の前にすべてを懺悔し二人で刺し違えて死のうとしたが、衣川に止められ兩人は出家する。袈裟と渡との間に生れた為若は成長して鳥羽の庵室に母を尋ね、一夜母の亡霊と逢ってことばをかわした。母の霊の告により、父が東大寺の俊乗坊重源であることを知り、尋ねて行くが父は名告りあわない。その後、為若は盛遠の文覚を母の仇とねらい、一太刀怨みをはらそうと高尾山神護寺におもむく。そして、その召使いとなって仇討ちの時機をうかがううち、文覚の法力に心服し、その紹介で新黒谷法然上人の弟子となって名をあげた。

これによって書き替えた「一心五戒魂」は、那智の滝壺で荒行中に悶絶した文覚の胸中から五つの玉が飛散し、文覚は、夢現のうちに、自分の過去未来を見ることになるという大杵をかまえ、少年時、虎若と名乗った文覚が、元服して盛遠、出家して文覚となるまでのあいだに、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五戒を犯すという筋を展開している。

この作の第三段は、盛遠が按察使大納言資方の娘薫姫と祝言の式をあげることになった日、同席の袈裟御前が初

恋の人と知って、叔母の衣川に袈裟御前と添わせるよう強要する筋となっているが、その後に展開する源の渡館の場面は、「鳥羽恋塚物語」の第二段目渡館に拠っていて、断片的ながら詞章上の関係も認められる。たとえば、袈裟が夫の身代りとなって死ぬ覚悟を固め、一子為若と別れを惜しむ場面を比較してみると次のようになる。

「鳥羽恋塚物語」

いたはしや袈裟御前。思ひもよらぬ盛遠のふかくじんに出会て。母のがいをのがれたため妻の渡をうたせんと。約束せし日限もけふの今宵に成にけり……

かほどにうすきゑんならばなどたいたいにて。ゆとも水ともなりはせで。思のきづながき世のまよひのたねかやうらめしや。……

為若わつとなき給へば。おちやめのはかけ来り。なせむつからせ給ふぞや為さまこなたへくとほくにいだきちをふくめねんくおろくと。すかしけり

「一心五戒魂」

御痛はしや。袈裟御前元よりつまの身に代り。死なんものをと思ひ切る心の色を知らせじと。もとの座敷に立帰り。……

扱も悲しやかく計浅きえにしと知るならば。いか成霜共見ぬうちに消えてはかなくなりもせで。蝶よ花よと撫子の別れに心ひかされて。長きよみちのさはり共ならん事こそ悲しやと……

為若おびえ目をさまし。わつと泣き出し給ふをばめのと立寄り。折角寝入り給ふをおいとしげにこなたへと。茂蔵にいただかせて。ねんくおろくと賺しつゝ

さらに、第四段は北山で修業をつみ、十二歳に成長した為若が鳥羽へ母を尋ね、一夜母の亡霊と出逢って語り明かすという、「鳥羽恋塚物語」の第三段を書き替えた場面を主要の見せ場としている。ここでも構想上の影響に止まらず、詞章上の類似性も指摘できる。たとえば為若が母の亡霊と出逢う場面である。

「鳥羽恋塚物語」

愛にとあるいはりの内にともしのひかり見へければ。

こはうれしやと立よりて戸をほとほととつれ給ふ。内より女のこととしてたれ人成ぞと有ければ。いや苦しうも候はず。都がたのものなるがしらぬ道に行くれ。ことに雨さへしきりなれば。一夜をあかさせ給れとさもしほ。くんとぞ申さるゝ。あるじとばそをしあけて。扱いたはしやいまだとしにもたらずして。いかで愛にはまよひ給ふぞ。先々こなたへくと。御手を取て内に入よきにいたはり給ひけり。

このように、詞章上の不即不離の關係は為若が庵の女主人を袈裟と知って互いに名告りあい、一晚語りあかしたのち、夜明けとともに母の亡霊が消え失せるところまでつづいている。

「つれく草」「あふひのうへ」と「蟬丸」

天和元年の宇治加賀掾正本「つれく草」は、加賀掾の段物集『若竹集』に「吉田兼好物語」とあるように、吉田兼好を主人公とし、随所に「徒然草」の文章をちりばめて成っている。この作の全体の筋はのちに宝永三年の近

「一心五戒魂」

蘆の丸屋の離れいほ。嬉しや茲に宿からんと戸をほとくとたゝかるゝ。内より女の声として。たそやそも訪ふ人もなき此宿に。夜中といひ何の用有てやと咎むれば。イヤ苦しうも候はず。我は都の者成が行暮れ道に踏み迷ひ。しかも雨さへ頻にて立寄るかげも候はず。一夜を明かさせ給れと声うちしほれの給へば。あるじ折戸をしひらき。ヨゝいとをしやとしはもゆかぬ身づからに。しんのやみぢを行まよひさぞ心憂くおはすらん。先々こなたへくと手を引内にいぎなひて

松作「兼好法師物見車」にとり入れられて複雑化されており、両作には、筋の運び、人物関係、詞章上でもかなり密接な関係が認められることができる。さらに、この作の第二段切で、兼好を慕って、皇女菅の宮のために思いをよげられぬ侍従の局が、嫉妬のあまり、貴船社に丑の時詣でをし、ついに、一念蛇体となる筋は、元禄初年の近松作「蟬丸」の第一段切の場面と酷似している。

「つれく草」のこの場面の筋の運びは次のようになっている。

- (1) 兼好に言い寄ったとがで主人の菅の宮から勘当された侍従は、貴船神社への呪いの丑の時詣でを思い立つ。
 - (2) 貴船神社の社人たちは都の女たちの丑の時詣でを防ぐため、神前の橋の中の間を引離した。
 - (3) 貴船の川にたどり着いた侍従は、岩を伝い、枯木の枝に取ついて川を渡り、神前にたどり着いた。
 - (4) 菅の宮を呪って侍従が鳥居に釘を打ち込むと鳥居から血が流れて貴船の川は紅に染まる。
 - (5) 帰途、先の枯木に頼って川を渡りかけた侍従は枝が折れて川に落ち込んだ。その瞬間、鳥居はうめき声を発し、御神体は猛火となって燃え、山は震動して車軸を流したように雨が降りだした。
 - (6) 侍従は蛇体となって鳥居を巻き、いずともなく消え失せた。
- これが「蟬丸」では次のようになっている。

(1) 夫蟬丸とその恋人直姫を兄の早広からたきつけられた北の方は嫉妬から狂乱する。

(2) 蟬丸の乳人左衛門の督清貫は直姫を探して宇治の橋姫神社に来、松の古木に登って女人の丑の時参りをのぞき見る。

(3) 蟬丸の北の方と蟬丸に思いをかける女院の上童芭蕉が直姫を呪って神木に釘を打ち込むと神木から血が流れる。

(4) 木から落ちた清貫に驚き、北の方と芭蕉は逃げ去ろうとしたが、北の方は清貫につかまる。

(5) 宇治川に投身自殺した北の方は嫉妬の蛇身となって鳥居を巻き、川に飛び込んで姿を消した。

前者の一人に対し、後者は二人の女性を登場させるなど、巧みに書き替えてはあるが、全体の構成、細部の段取にまぎれもない類似性を看取することができよう。前者の(1)と後者の(1)、(4)と(3)、(5)と(4)、(6)と(5)などの対応は、丑の時参りの定型を襲ったものとはいいながら、それに止らず、後者は前者を参照して書かれたものという感じを捨てることはできない。

加賀掾にはもう一作女性の丑の時参りを仕組んだ作がある。信多純一氏によって貞享初年頃の刊行と推定されている^{注11}「あふひのうへ」である。謡曲「葵上」によって、光源氏の思い人御息所が北の方葵上との車争いに負けたことを恨んで、貴船神社に丑の時参りをして葵上を苦しめるという筋であるが、この作の第三段「みやす所きぶね詣」で、御息所が貴船神社に丑の時参りに出かけ、これも葵上に夫を奪われたと思いこんで嫉妬する市原野の農夫の妻と行遇い、共に格気講を始める辺は「蟬丸」と詞章上の類似性も指摘できる。

「あふひのうへ」のこの場面の筋の展開は次のようになっている。

(1) 北の方は嫉妬心から貴船神社への丑の時参りを思い立つ。

(2) 北の方は、貴船川を風に吹き倒された大木を伝って渡り終える。

(3) これも葵の上に嫉妬する農夫の妻と行遇って共に神木に釘を打込んだあと、二人連れ立って下向する。

以上のようなであって、釘を打ち込まれた個所から火を発する趣向、川へ入水して蛇身となる筋などはみられないが、この作の(3)の個所と「蟬丸」の(3)の個所に詞章上の類似性が認められる。

「あふひのうへ」

なふそれなるは何人ぞとあればかれもはつとをどろき。して又さいふはいか成人ぞ……我とても。御身にかはらぬかたちなれば神へのねがひもかはるまじ。さだめて御身もしつとよの。いかにもくしつとなるが。御身もおなじねたみかや……御身のこのごもしやうわるかや。しからばいざ立ながらりんきかうをはじめ。たがひにかたりてなりともうきをはらさん……

大きくぎを取出し。扱神木に立かゝり。是はにくき葵上が両がんにうつくぎ也。はやつぶれよと丁ど打。是は葵がむないた心もとへうつくぎなり。五たいくだけてみじんになれと廿四本のくぎのかず。つがひくふしくへせめては打て慰めと。おどりあがりとびあがり丁々ど打ければ。さしもにふときたいばくもゆるぐ計に見えにけり。

こうしてみると「蟬丸」の丑の時参りは、「あふひのうへ」の詞章に「つれく草」の筋の運びを加えて成立したものであったことがわかる。

「念仏往生記」と「大原問答」「文武五人男」

「蟬丸」

なふわ上らうは何人ぞとあればさいふ御身は何者ぞ。ヨ御身にかはらぬ姿なればいのりもおなじしつとよの。されば我もりんき事扱も世の中に性のよき事はなし。扱々あふたりかなふたりいざ立ながらりんきかうをはじめ。かたりてうきをはらさんと

くぎ取出し。是はなを姫が両がんにうつくぎはやつぶれよと丁ど打。是くびのほねむないた五たいくされとはたと打。四十四本のくぎのかずすぢほねふしくつかひく。打て思ひをはらせよとおどりあがりとびあがり。てうくはたく丁どうてば。くぎめよりちながれてさしもの大木ゆるぐにぞ。

延宝六年秋八月刊行の加賀掾の段物集『竹子集』に、「大原問答」の題で、「名所」、「道行」、「九ほんのじゃうど」の三章が収められており、「道行」の章は、これより先の同年三月刊行の加賀掾段物集『道行揃』にも収録されている。ただ、この延宝六年三月以前に刊行された「大原問答」という正本は現存せず、これを改作・改題した「念仏往生記」という山本版の八行本が残されている。この再稿「念仏往生記」の成立時期を藤井乙男氏は天和ごろと推定され、信多純一氏は、天和三年二月刊行の『乱曲集』以降とされている。^(註13)さらに、元禄初年頃版の義太夫本「大原問答」は、加賀掾の八行本をそのまま襲用し、ただ第三段の「名所づくし」を「洛陽町づくし」と改めて文章を書き替えている。この義太夫本は、竹本義太夫・近松門左衛門の連名の奥付を持ち、近松門左衛門の名の下には花押も添えられている。さらに、この義太夫本「大原問答」はのちに「大原問答青葉笛」、さらに「須磨寺青葉笛」と改題刊行されるが、この後者の二作には筑後掾と近松連名の奥付がある。

「念仏往生記」の第二段「きよ姫兄弟道行」は、『道行揃』や『竹子集』に収められている原「大原問答」の「道行」が「あらいたはしや。たねなをは」と種直一人の道行とするのを「あらいたはしや。清姫たねなを兄弟は」として、清姫という女性を登場させるだけで、他は同文である。しかし、ふしづけは同じ加賀掾の語り物でありながら、若干の相違がみられる。

同様なことは、原「大原問答」の「名所」や「九ほんのじゃうど」と「念仏往生記」の「名所づくし」や「九品の浄土」についてもいえる。詞章は連結する箇所を除けばほとんど全く同文であるが、節付にはわずかながら相違がみられる。

義太夫正本の「大原問答」はこの「念仏往生記」の「名所づくし」を「洛陽町づくし」として書き改めている。義太夫がなぜ他の部分は加賀掾の「念仏往生記」をそのまま利用しておきながらこの節事部分だけをとりかえたの

か、その理由は明らかでない。ただ、このおきかえられた「名所づくし」に比較して「洛陽町づくし」ははるかに軽快な元禄調が横溢しており、節事としてはすぐれている。

「文武五人男」は十行二十九丁本（天理図書館所蔵）の内題下に「近松門左衛門作」とあって近松の確実作にかぞえられる。しかし、この作の上演年は明らかでなく、『鸚鵡篝中記』元禄七年七月十五日の条に名古屋在御器所村で竹本義太夫が「文武五人男」を上演した記録がみえるのでこのとき以前の成立であることが確かめられるだけである。この作の第三段に「からあや名所づくし」という節事がある。この作は頼義の叔父頼親入道が頼義を除くうとして種々の悪計をめぐらすのを頼光の臣下の一人武者と四天王の子供たちの五勇士が主人頼義を助けて頼親を滅すことをのべた作で、その第三段は、小塩山山荘に世を忍ぶ頼義の許婚光姫の許へ坂田金平の妹唐綾と下女が訪れてきて頼義の消息を伝え、さらに、東山の名所尽しを語って光姫を慰める条である。

「からあや名所づくし」は「念仏往生記」の「名所づくし」に若干の修正を加えたにすぎないものである。その修正の箇所を比較してみると、明らかに表現のむずかしい箇所をわかりやすく改めたものである。たとえば次の通りである。

くはんむでんげう御心をひえいして↓くはんむでんげう御心をひとつにして

くも水は。是くはんをんのしやすいかや。によいがだけより。↓くもみづはによいがだけより

つま木こる身も恋。するやかげは。やせのさと人↓つまぎとる身も。恋するやかげはやせのさと人。

節章は、大体は「念仏往生記」に拠っていて、しかも、流行歌や掛合語りを取入れて変化をはかっていたことがわかる。この場合も、節事の近世化、元禄化が進んでいたといえよう。

「甲子祭」と「蟬丸」

「甲子祭」の第五段、弁慶の夢想到善女竜王が出現し、「人間懐胎誕生の相」を物語る節事は、元禄初年上演（元禄十五年再演）の近松作「蟬丸」の第五段の節事「懐胎十月の由来」に利用されている。「蟬丸」の利用の方は、「甲子祭」の節事をほとんどそのままに用い、二月以降の各月は一部を省略し、十月以降は全く別文に書き替えている。節付は異っている。省略したのは語り物の長さの関係からであろうが、十月以降が別文に書き替えられた理由は明らかでない。「甲子祭」の方では、源義平の子を身籠った帥の内侍がその子を誕生する場面となっているのに対し、「蟬丸」の方では、蟬丸の北の方の怨念を慰めようとして行われた法事の席で導師の安居院の小聖が語る場面となっていて、かならずしも子を誕生させる必要がなかったから、「甲子祭」の節事をそのまま用いることができなかったのであろうか。

「千載集」と「薩摩守忠度」

宇治加賀掾の正本「千載集」は藤井乙男氏によって主人公薩摩守忠度の五百年忌に当る貞享二年の刊行と推定されている。^(金14)この作は翌貞享三年に改訂作「薩摩守忠度」を生む。この「薩摩守忠度」の八行本、十行本などの奥付には近松署名があり、旧古鞆文庫蔵の十二行本には「貞享三丙寅初冬吉辰」の刊記があった。

「千載集」は藤原俊成が撰者となった勅撰集「千載集」の編纂時における薩摩守忠度のエピソードを中心として構成されている。

一の谷の合戦で討死の覚悟をきめた忠度は和歌の詠草を藤原俊成に托そうとして都落ちの途中から引返したところを源氏の武士岡部六弥太に咎められたが、一命を助けられた。忠度のかねて関係を持つ愛人、俊成の娘菊の前に一枚の短冊を渡し、同筆同字の短冊を戦場にたずさえる。その帰途、稲毛の別当瑞劔に忠度は襲撃されたが、六弥太がこれを追払ってくれた。一の谷の合戦で六弥太は止むなく忠度を討ち取った。一方、稲毛の別当も

忠度と名告る武者を討取ったが、こちらは、忠度にかつて一命を助けられた須磨の海女時雨が身代りとなったものであった。戦功記録の際、六弥太の得た首は偽首と定められたが、六弥太は鎌倉に下って頼朝へ訴訟して名譽を回復し、稲毛の別当は悪事露頭して罰せられた。

「薩摩守忠度」はこれと筋はほとんど同一であるが、詞章はすっかり洗練されて面目を一新し、また、稲毛別当瑞勸は道善、須磨の海女時雨は三月と名を改め、他に第四段を一部改作している。

一例として冒頭部分を比較すると次のようになっている。

「千載集」

抑後白河の院の御宇に千載集をえらばる。五条の三位俊成の卿。承つて是をせんず年は寿永の秋のころ。都を出し時なればさもいそがはしかりし身の。く。心
の花か蘭菊の。狐川にぞ着給ふ。

「薩摩守忠度」

としはじゆゑいの秋の比都を出し時なれば。さもいそがはしかり身の。く。心の花からんぎくの。きつね川にぞ。着給ふ。

「千載集」は浄瑠璃の大序の定型に従つて、世界設定を行なっているが、ただ、この冒頭文はすこしあとに「此度後白河の院宣をうけ。五条の三位俊成ノ卿千載集をえらばる」という忠度のせりふと重複している。「薩摩守忠度」はこれを避けて冒頭の文句を省略してしまったものであろう。こうした配慮が随所にみられる。また、第四段の改作の持つ意味についてはかつて考えたことがあるが、謡曲の修羅物「忠度」によって複式夢幻能の構成をとった「千載集」に対し、「薩摩守忠度」は菊の前の男子出産という、きわめて人間臭い、現世的行為におきかえている。

「扇の芝」と「佐々木大鑑」

義太夫正本の「佐々木大鑑」は八行本内題下に近松門左衛門の署名がある。内題下に近松の署名を持つ最初の作品である。奥付に「貞享三年丙寅七月吉日」の刊記があつて、この作の刊行年は明らかである。一方、宇治加賀掾の正本「扇の芝」は貞享三年七月吉辰刊行の加賀掾段物集『新小竹集』に収録されているところからこの年の刊行と推定される。信多純一氏は、「佐々木大鑑」の第一段末の藤戸の海先陣争いの個所と、「扇の芝」の第一段末の宇治川の先陣争いは同一文で、共に謡曲からとつて、一二の字句を修正したにすぎず、登場する女主人公二人の濡れ場など全体的にも同構成をとつているところから「佐々木大鑑」の前、程遠からぬころの成立と考えておられる。¹⁶

「扇の芝」の第一段は、高倉宮を奉じて兵を挙げた源頼政が平等院で平家方と戦つて敗れ、自害するまでの筋をしくんでいるが、ここで、平家方の田原又太郎忠綱が、頼政の娘讃岐、竜田の姉妹を助け、讃岐が高倉宮の胤を胎内に宿していると知り、これを落ちのびさせようとし、味方に発見されて止むなく讃岐の首を打つ件がしくまれている。熊谷・敦盛の一件のパロディであるが、「佐々木大鑑」の第一段の筋の運びはこれときわめて酷似している。源氏に追われて備前の児島に陣取つた平家方を攻めるために海中の浅瀬を探る源氏方の佐々木三郎盛綱は、塩焼の娘待宵、時雨の姉妹を助け、その父藤太夫から浅瀬を教わるが、その場を兄の広綱に見られ、功を己れ一人のものとするために藤太夫の一命を断つた。全体は謡曲「藤戸」によつて、しかも、人物の関係、筋の構成に「扇の芝」と類似するものがある。さらに、明らかに詞章上の類似性の認められる個所は、そのあとにつづく先陣争いの個所である。

「扇の芝」

「佐々木大鑑」

田原ノ又太郎忠綱となつて。宇治川のせんちん我也

宇多の天皇の末孫佐々木の三郎盛綱藤戸の海の先陣

と。なのりもあへず三百余騎くつばみをそろへ川水に。少もためらはすむれゐる。むら鳥のつばさをならぶるはをとまかくやとしらなみにぎつ。くくと打いてうきぬしづみぬわたしけり。忠綱兵をげちしていはく。水のさかまく所をば。いはありとしるべしよはき馬をは下手にたて。つよきに水をふせがせよ。ながれむしやにはゆはづをとらせ。互に力をあはすべしと只一人のげちによつて。さばかりの大河なれども一騎もながれずこなたのきしに。おもいてあがればみかたのせいば。我ながらふみためず。半町計おぼえずしきつて。きつさをそろへて爰をさいごとくかふたり

「扇の芝」の方は謡曲「頼政」と全くの同文であるが、「佐々木大鑑」の方は多少文句を改めている。節付は、「佐々木大鑑」の方が複雑になっている。

「盛久」と「主馬判官盛久」

宇治加賀掾正本の「盛久」は「千載集」の後編として書かれ、竹本義太夫正本の「主馬判官盛久」は「薩摩守忠度」の後編として書かれている。そして、『近松全集第二巻』には、奥書に竹本筑後掾と近松門左衛門兩名の署名のある「主馬判官盛久」の八行四十七丁本が収載されている。

「主馬判官盛久」は「盛久」を同文的に利用し、部分的に多少の字句の修正を施し、はるかに洗練された詞章に

と。天もひゞけとよばれば。すはやつゞけと三万余騎。くつばみをそろへ白波にぎつくと打入れ。うきぬしづみぬ渡しけり。盛綱兵を下知していはく。波のさかまく所を。岩有としるべしよはき馬をば下手に立てつよきに波をふせがせよ。ながれ武者には弓筈をとらせ。互に力を合すべしと。只一人の下知によつて。さばかりの難所なれども一騎もながれずむかふの岸に。おもいてあがれば平家の勢は。我ながらふみためず半町計覚えしきつて。きつさをそろへて爰をせんどゝ戦ひける。

つくりかえてゐる。一、二の例を示せば次の如くである。

「盛久」

去程に御船をはじめて。一門皆々舟にうかめば乗をくれじと。汀に打よせれば御座船も兵船も。はるかにのび給ふ。せんかたなみにこまをひかへ。あきればてたる有様なり。

共に第一段の冒頭の文句である。「盛久」の方は謡曲「敦盛」の文句を利用して書かれているが、その文句に頼りすぎて状況が全く不分明であるのに対し、「主馬判官盛久」の方は文句を補って状況を説明している。

「主馬判官盛久」

ながとの国へもかたきむかふと聞しかば。又ふねに取のりていくともなくをし出す。かゝるをりふしみかたともてきかともいさしろたへの。うの花おどしに月毛のこまうみへさつと打いれしか。一もん皆々ふねにうかめばのりをくれじとみぎはに打よれば。御座船もひやうせんもはるかにのび給ふ。

きさまはわが命の子。こゆへのやみにまよひしぞなふかうくあれとぞ仰ける。盛久重て扱ももたれし女かなたすけられてめいわく也。いくさなかばの事なればせひこゝをはなしてたべ。エゝさほどに思召すならば。さいぜんわらはが参らせし水をかへさせ給へとある。盛久おかしく思召。扱々むり成人に出あふたり。いで水返し申さんとつばきばきしてゆかんとす。どこへくさな上手をなし給ひそ。いぜんはみづから口よ

り口へまいらせたり。とてもかへさせ給ふならば。此
お口からといひけして。かほに火をたくはもじさや。
袖をひねりて申さるゝ。

主馬判官盛久は小松殿から妻として賜った女房床夜を探して平家の御座船に引返そうとするが、床夜の姿の見えぬことを告げられて死を覚悟する。そのとき、流れ矢が馬に当って落馬して気絶した盛久を海女の明ぼのが介抱する。気がついた明ぼのと盛久のあいだに交わされる会話が右の引用文であるが、「盛久」に比較して、「主馬判官盛久」の方は大幅に対話を増加させ、盛久に恋慕した明ぼのの濃厚な情を表現するのに成功している。なお、こうした字句の修正の他に、「主馬判官盛久」では、第二段の土屋陣中の場面で、土屋の三郎に預けられた盛久を鎌倉へ護送する駄馬徴発の個所で、「あけぼのむまこうた」の節事が新しくつけ加えられ、さらに第五段で、鶴が岡社の場面で、頼朝の裁きによって、小山太郎宗重の悪事が露頭して一件落着のあと、千羽の鶴の放鳥の見せ場と「源氏大系図」の節事が加えられている。この増補の持つ意味については別稿で考えたことがある。^{註17}

「弁慶京土産」と「本朝用文章」

「本朝用文章」の八行五十丁本の山本九兵衛版の奥付に竹本義太夫・近松門左衛門連名の署名があり、義太夫には印記、近松には花押が認められる。藤井乙男氏は、「本朝用文章」は「弁慶京土産」の改作で、共に元禄初年の成立かと推定しておられる。

「本朝用文章」は『太平記』によって日野資朝の一子阿新丸の事蹟を脚色している。日野資朝の家来石見守中原は相模入道と内応して、やがては相模入道に敵対するであろう資朝の子阿新丸を玄恵法印に依頼して剃髪させようとするが、資朝の執権左衛門尉藤原が駆けつけて阿新の出家を中止させる。石見はその後も資朝を殺そうとはかっ

て果さず、資朝は佐渡へ流され、その地の郡司本間入道に殺された。阿新は父の愛人菊の姫と共に父を慕って佐渡へ渡り、本間入道を討ち果し、土地の修験者妙法坊に助けられて佐渡を脱出、南都新能の折に左衛門尉藤原や妙法坊の援助によって逆臣石見等を亡ぼした。

この「本朝用文章」と文章・趣向のうえで密接な関連を持っているのが角太夫の語り物「弁慶京土産」である。

この作品は牛若と弁慶の活躍を中心にしくみ、清盛の計略によって出家させられようとした牛若が鎌田兵衛の一子三郎正親に救われて鞍馬を脱出、鬼一法眼の娘千鳥の前と契って法眼の怒りを買ひ、一命の危いところを弁慶に助けられて尾張の常陸坊海尊を頼り、さらに奥州の藤原秀衡の許へ辿りつくまでを脚色している。「本朝用文章」と「弁慶京土産」は深い関係にあり、人物関係でも場面構成でも両者は対応している。この両者の前後関係について、藤井乙男氏は『近松全集第三巻』の解説中で、「その前後は定めにくいだが、趣向として京土産の方が自然に近いやうに思はれる。用文章はこの改作ではなからうか」と推測された。筆者もこの藤井氏の推測に従って、両者の文章を具体的に比較、検討して、氏と同様な結論に導かれている。^{注18}

四

これまで、寛文三年の「公平法門諍」と元禄二年の「忠臣身替物語」に始まって、元禄初年の「弁慶京土産」と「本朝用文章」に及ぶまで、全十六例にわたって、元禄以降の近松確実作または存疑作といわれるものと元禄以前の古浄瑠璃との関係を検討した。この検討を通して期待したことは、貞享までの作者不明の作品群のなかに近松の青年期の述作と考えられるものを見出し得るか、あるいは、それを見出すための何らかの手掛りが得られるのではなからうかということであった。以下、これまでに検討してきた結果を整理してみよう。

右に検討した類例中には、種々の段階にわたって、近松の確実作と存疑作が含まれていた。即ち、近松の確実作は次の七作である。

「出世景清」「弘徽殿鶉羽産家」「姫山姥」「娥哥かるた」「蟬丸」「文武五人男」「佐々木大鑑」

これらの七作は内題下に近松の署名を有するか、或は「出世景清」のように他の文献によって近松の作であることを疑うことのできない作品群である。この七作につぐ準確実作は、奥付に近松の署名があつてしかもそこに花押のみられる「大原問答」「本朝用文章」の二作である。

最後に存疑作として、奥付に近松の署名はあるが花押のない次の五作があげられる。

「忠臣身替物語」「源氏烏帽子折」「一心五戒魂」「薩摩守忠度」「主馬判官盛久」

以上の合計が十四作となつて、十六例に二例欠けるのは、「蟬丸」が「つれ／＼草」「甲子祭」「あふひのうへ」の三作と関係するからである。

確実作七作の検討によつて得られた知識は次の通りである。

- (1) 太夫未詳の古浄瑠璃から筋立上の構想を得ることがあつた。「出世景清」
- (2) 特色ある場面について、太夫未詳の古浄瑠璃の詞章を若干書き替えて利用することがあつた。「出世景清」
- (3) 井上播磨掾の作品から節事をほとんど同文で採用することがあつた。「弘徽殿鶉羽産家」
- (4) 宇治加賀掾の作品から節事をほとんど同文で採用することがあつた。「弘徽殿鶉羽産家」「姫山姥」
- (5) 伊藤出羽掾の作品から構想を得ることがあつた。「娥哥かるた」
- (6) 山本角太夫の作品から節事をほとんど同文で採用することがあつた。「娥哥かるた」
- (7) 宇治加賀掾の作品から特色ある場面の詞章をとつて利用することがあつた。「蟬丸」「佐々木大鑑」

(8) 宇治加賀掾の作品から特色ある場面の構想を借りることがあった。「蟬丸」「佐々木大鑑」

(9) 宇治加賀掾の作品から節事を借り、若干書き改めて利用することがあった。「文武五人男」

右の九条のうち、(1)(2)(5)(7)(8)などは、当時の浄瑠璃作者が普通に行なったことで、この程度の関係で、先行作と後行作の作者の同一性を指摘することは不可能であろう。問題は、(3)(4)(6)(9)などの節事の関与する場合である。節事は作詞者だけでなく、作曲者としての太夫も大きな責任を分担する個所であり、太夫と作者を含めての先行者と同じく太夫と作者を含めての後行者との何らかの関係を想定すべきではあるまいか。

ここで思い合わされるのは、元禄末年以降の宇治座が、しばしば竹本座の近松の作品を若干の詞章の書き替えを行なう程度で殆ど同文のものを自座の正本に利用していることである。この場合、この宇治座の正本にも内題下に近松の署名のあるものが存在する。これは、しかし、作者近松は関知せず、宇治座の太夫が全体の責任を負って改訂を行なっているであろう。

(6)の事例について、阪口弘之氏は前に触れた論考で、角太夫・義太夫のコンビで道行を語った可能性を想定され、「哥娥かるた」に角太夫の作品から道行文の採られた理由を作者近松よりもむしろ竹本義太夫の意志とされた。これは注目すべき見解といわねばならない。この考え方を導入すれば、(3)の事例に於て、近松が直接井上播磨掾の正本の執筆に当たったとするような無理な推論をさけて、中間に、井上播磨掾にふかく影響された宇治加賀掾を以て考えることができることになる。しかし、太夫論の導入だけでこの種の問題をすべて解決してしまおうとすることにも限界があるように思われる。結論は避けて、次に正確実作の二作について吟味しよう。

(10) 宇治加賀掾の正本を節事を取換えただけで義太夫正本として利用することがあった。「大原問答」

(11) 角太夫正本の結構、詞章を全面的に利用して義太夫正本に書き替えることがあった。「本朝用文章」

この二条は確実作にみられぬ新事実であった。そして、この二条から作者近松の役割を全く拭い去ることは、太夫としての義太夫の役割を全く除去してしまう以上に困難ではあるまいか。例えば、(11)条に於て、義太夫が角太夫の「弁慶京土産」に特別の関係があり、その思い出によってこの作を竹本座の語り物として利用したと推定することは、「弁慶京土産」が、すでに竹本義太夫が竹本座の最高責任者として独立している元禄初年の作品であるだけに無理がある。やはり作者近松の関与によって、角太夫正本が義太夫正本に流用されたとみるべきであろう。もっとも、『外題年鑑』や『声曲類纂』に拠れば加賀掾の語り物にも「弁慶京土産」という外題の作品があったようである。もしこの加賀掾作品が発見されれば(11)条についてはまた別の推測が成立するかも知れない。

存疑作の五曲を検討してみよう。

(12) 天下一上総少掾藤原正信の語り物を利用し、その節と詞章を取入れて作品を書くことがあった。「忠臣身替物語」

(13) 宇治加賀掾正本の結構、詞章を全面的に利用して義太夫正本に書き替えることがあった。「一心五戒魂」「薩摩守忠度」「主馬判官盛久」

その他の存疑作として「源氏烏帽子折」があるが、この作の成立の仕方は確実作から抽出した(4)条に含めて考えることができる。右の二条のうち、(12)条は、(1)条(2)条などと同様な意味合から、近松青年時の述作を検討する条件から外してよからう。しかし、(13)条は、(11)条と同様な例で、「一心五戒魂」以下の三作がもし近松の作と確定されたあかつきには、重要な条件として生きてくることになるう。

これまでのべてきたことをまとめて、今後のより突込んだ考察のための足掛りを用意しておく、以下のようになろう。

元禄初年までに書かれた竹本座の近松の確実作、存疑作のうち、先行の他太夫の作品と深い関係を持って成立した十六例について検討した結果、十三条の要件を抽出することができた。その十三条の要件をさらに考察し、宇治加賀掾、山本角太夫の語り物に限って、(1)まず節事が同文的に義太夫本に利用されている作、(2)前条が満たされたうえで結構、詞章、節事などがそのままに、あるいは部分的に書き替えられて義太夫本に利用されている作は、近松青年時の述作として考慮する余地が存在すると結論される。

その際に留意すべきことは、作者近松の他に、太夫竹本義太夫の関与をも考慮する、また、節事部分だけが利用されている先行作は、その節事部分のみを対象に限定して、全一作を近松作とするような拡大解釈をしないこと、の二点であろう。また、先行作を宇治加賀掾と山本角太夫の語り物に限るのは、山本版六行四十三丁本の「曽根崎心中」に寄せた近松自序に拠っている。^{註19}

以上の結論によって、近松青年時の述作として今後の考察の対象に上すべき作品は次のようになる。

「殿上之うはなり討」第四段道行

「為義産宮詣」第四段「とうろうの四機」

「よこぶえたき口恋之道心」第三段道行

「念仏往生記」

「弁慶京土産」

「鳥羽恋塚物語」

「千載集」

「薩摩守忠度」

「三社託宣由来」第五段「二位中将宮めぐり」

- 注1 『日本名著全集江戸文芸之部近松名作集上』（大正十五年十一月）
- 注2 『劇代集』の所在は不明。
- 注3 『滝口横笛紅葉之遊覧』とその周辺―近松存疑作試論―（人文研究一九七八、第三十卷第一分冊）
- 注4 「宇治加賀掾年譜」（横山重氏編『加賀掾段物集』昭和三十三年、古典文庫）
- 注5 「公平法門評」の本文は室木弥太郎氏編『金平浄瑠璃正本集第二』（昭和四十三年、角川書店）に拠る。
- 注6 拙稿「元禄初年の近松」（『井浦芳信博士華甲記念論文集芸能と文学』昭和五十二年、笠間書院）
- 注7 前掲注5の室木弥太郎氏解題
- 注8 「古浄瑠璃『かげきよ』と『出世景清』の関係」（『文学』昭和二十八年七月号）
- 注9 横山重氏編『古浄瑠璃正本集第四』（昭和四十年、角川書店）
- 注10 前掲注9
- 注11 前掲注4
- 注12 『近松全集第一巻』（大正十四年、朝日新聞社）解題
- 注13 前掲注4
- 注14 『近松全集第二巻』（大正十四年、朝日新聞社）解題
- 注15 拙稿「貞享の近松―加賀掾から義太夫へ―」（『国語と国文学』昭和五十年十月号）
- 注16 前掲注4
- 注17 前掲注15
- 注18 前掲注6
- 注19 拙稿「延宝の近松―存疑の世界―」（『文学』昭和五十年六月号）